九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

竹岡勝也の肖像(上)

山口, 輝臣
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門日本史学 : 助教授 : 日本近代史

https://doi.org/10.15017/7966

出版情報：史淵. 143, pp.1-25, 2006-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

竹岡勝也の肖像（上）

山口輝臣

一　福岡・太宰府・札幌・仙台・東京　後半生
二　山寺　少年時代
三　山形　中学時代
四　仙台　高校時代
五　東京　大学時代
附　竹岡勝也年譜および著作年表

（以上、本号）

自分は果して歴史家といわれるであろうか[1]

十歳上の兄・阿部次郎が『三太郎の日記』を上梓したのは大正三年（一九一四年）四月。阿部勝也、のちの竹岡勝也は、旧制二高の三年生であった。そのときのことを、勝也はこう回顧している。

かうして一冊の本に纏めらた三太郎日記を手に取つて見ると、流石に嬉しい思ひをせずには居られなかつた。自分は早速難解の言葉を噛み砕きながら、これに読み耽つたものであつた。是までは哲学者として遥かなる世界に描いて居た兄の姿が、今は三太郎として自分の身近かに下つて居る。そして自ら進みゆく道を語りながら、自分の魂にも親しく呼びかけて呉れる。（中略）自分は矢張りこの三太郎と同じ血に繋がるものを自らの内に発見し、この意味に於て一層身近かに、自らの導師として三太郎を迎へ得た事に、限りなき喜びを感じ、またその幸福を感謝しないでは居られなかつた。[2]

三太郎と同じ血の流れていることを感じ、かれを導きの師とした勝也だが、ある意味で当然のことながら、三太郎、そして兄・次郎とは異なる道を歩んでゆく。二高から兄と同じ東京帝国大学文科大学に進んだが、哲学ではなく史学科で国史学を専攻、これを一生の仕事とすることとなる。

このことはいくつもの興趣を誘う。ひとつふたつ挙げてみよう。

いわゆる大正教養派なるものについては、「古典と通称されてゐるさまざまの花から、さまざまな蜜をあつめることが教養といふものとされた」として、一方ではその社会性の欠如、他方では人類と個とを直結させるその思考法などが厳しく批判されてきた。そして教養派の代表ととされてきたのが、阿部次郎であり、『三太郎の日記』である。[3]

こうした見方の上に、例えば、次郎が洋行（大正一一年～一二年）によって「日本と親しくなった話」[4]を繋げると、知識人における日本回帰という周知の物語が生み出されてくる。[5]一方で同じ見方に社会の発見という物語が重ね合わされると、「大正教養主義からマルクス主義へ」というこれまたよく知られた図式が導かれる。[6]これらにもたれかかりつつ勝也の軌跡を理解しようとするならば、兄の影響から脱しつつ自己を形成していく様を、大正教養主義からの離反と解していくことになるだろう。だが勝也はマルクス主義へ敵対こそすれ、それを受け容

れることは、生涯を通じてなかった。

大正教養主義からマルクス主義へという単線的な図式のみでこの時期の思潮を理解することはやはり無理がある。そう考えたとき、歴史家・平泉澄を、阿部次郎の唱えた人格主義を歴史によって超えようとした人物として描いた試みが思い出される。[7] 平泉澄は大学で竹岡勝也と同期（大正四年入学、同七年卒業）であり、この視角は勝也を考える上でも、一定の役割を果たすことができるだろう。ただし気になる点がないこともない。例えば、勝也は国史学専攻を決めた要因のひとつとして、「兄の言葉からの暗示」と記す。[8] 人格主義の超え方という視角からこのことを理解するには、いささか困難がともなう。またこの暗示は、日本への回帰という物語によって次郎や勝也を捉えようとする試みはもちろん、おそらく日本回帰の物語そのものへも、再考を迫るものであるだろう。

本稿で試みたいことは、こうしたことを念頭に置きつつ、竹岡勝也という人物の軌跡を叙述すること、とくに明治二六年（一八九三年）のかれの出生から、歴史家としての修業時代にほぼ別れを告げ、九州の地へと赴任した昭和初年までの時期について、その個人史にまでさかのぼりながら記していくことである。そしてそれによって浮かび上がってくるさまざまなもの、とりわけ大正日本における「新しい歴史学」の企てにまつわる葛藤のようなものを、あらためて見つめ直すことである。しかも最晩年に生涯を振り返っての第一声が、「自分は果して歴史家といわれるであろうか」であった人物であることを銘記しながら。

言い換えると、絵を描くにあたり、ある人物をどこに据えるのがもっとも相応しいかと悩むのではなく、その人の肖像を微細に描いていくことで、自ずと周囲の雰囲気までが伝わるよう試みたいということである。おそらくこれが、かれやかれと指向を同じくした人びとへもっとも似つかわしい近づき方なのでははあるまいか。[9]

そもそもかれの世代の歴史家については、平泉澄（一八九五～一九八四）を除くと、個人史にまでさかのぼった研究自体ほとんどない。史料的に恵まれているとは言い難い竹岡勝也ではあるが、かれについてこうした作業

を行うことそのものに、十分意味は見出せるだろう。またその場として、勝也がどこよりも多く論文を発表したこの『史淵』以上に似つかわしいところは、そうは見当たるまい。

一　福岡・太宰府・札幌・仙台・東京　後半生

竹岡勝也という名を聞いて、その業績が次々と頭に思い浮かぶという方は、さすがに『史淵』の読者のなかでも多くはなかろう。そこで次節以降への導入として、この「肖像」では十分に触れることのできない後半生について、勝也の学者としての業績を中心にここでまとめて記しておこう。なお、詳細な年譜や著作目録については、連載の最後に掲げることにしたい。

＊

明治二六年（一八九三年）生まれの竹岡勝也は、昭和三三年（一九五八年）に急逝するまで、数え方にもよるが、八冊の単著と、数冊の共著のほか、論文を中心に一〇〇篇ほどの文章を残している。

最初の著書『平安朝末期』を大鐙閣より出したのは大正一一年（一九二二年）、数え年で三〇歳。本書は、追って詳しく説明するが、『日本文化史』という全部で一二巻からなる通史の一巻であり、企画の斬新さと、類書の乏しさとにより、戦前だけで何度か再刊されるほど読者を獲得したシリーズであった。[10] このうち勝也の担当した『平安朝末期』は、勝也の死後の昭和四六年にも、角川選書の一冊として『王朝文化の残照』とタイトルを替えて刊行されている。現在もっとも入手しやすい――といっても入手先は古書店か図書館に限られるが――勝也の作品であることは間違いない。

このほか主著ともいうべきものに、『近世史の発展と国学者の運動』[11]、『日本思想の研究』[12]、『日本思想史』[13]などが

ある。『日本思想の研究』は、「日本民族の特性」にはじまり、「記紀の成立に就て」、「愚管抄と神皇正統記」などを経て、「国学の発達」へと至る論文集。『日本思想史』はB六判三二七頁の通史。このように見てくると、研究者としての竹岡勝也は、平安末期と近世の国学に関する単著を持ち、それらを得意分野としつつも、広く日本史全般について、主として文化史的ないし思想史的な観点で研究を進めた人物と言うことができるだろう。『現代の問題としての復古思想』[14]や『創学校啓—国学の建設』[15]などの小品も、そうした一環と見ることもできる。

さて右で掲げた著書は、はじめの『平安朝末期』を除き、いずれも勝也の九州帝国大学在職時代——居住地でいうと福岡時代——の刊行である。この点からも、福岡時代がかれの研究に持った重みは理解できよう。

*

勝也が九州帝国大学へ赴任したのは昭和二年六月。同大学に法文学部が開設されたのは大正一三年九月であり、[16]翌年一二月に国史学講座へ長沼賢海[17]が着任。さらに一五年五月に国史学の講座増設が認められ、第二講座（日本文化史）が置かれたことにともない、勝也が助教授として招聘されたのである。なお、長沼賢海晩年の回顧によると、当初の候補者は坂本太郎であったという。[18]勝也が着任した昭和二年頃から史学系の教官のあいだに学会設立の機運が高まり、翌年には九大史学会が誕生、四年一二月に機関誌『史淵』が発刊された。勝也もこうした動きに積極的に関わっていった。

昭和四年六月に教授へ昇任、国史学第二講座を正式に担当。福岡の西郊・鳥飼に居を構えた。東京で生を受けた佳子（大正九年誕生）と洋子（一二年）に続き、和田男（昭和三年）・国雄（五年）・美那子（八年）と生まれ、一家は随分と賑やかになった。のちに映画評論などで知られるようになる長男の和田男は、子供の時分に父・勝也と映画・唐人お吉を見に行ったこと、そしてその数日後、勝也が自宅の手回し蓄音器で主題歌「駕籠で行くのはお吉じゃないか」のレコードを掛けたことを書き残している。[19]また東京時代から懇意にしていた画家・小島善

太郎に対してさまざまな支援をしたのも、この頃のことである。[20]赴任からしばらくは落ち着いた月日が過ぎていった。

当時の帝大教授にとって通過儀礼ともいうべき洋行に関しては、昭和九年三月に精神史学研究のためドイツへと出発、欧州各国を歴訪し、北米経由にて一一年二月に帰国した。[21]このほか六年を皮切りに一四年・一六年と中国へ出張しており、[22]また昭和八年の秋や一八年の夏をはじめ朝鮮へも何度か足を踏み入れている。[23]

大学での授業では、当初、近世の思想史を講義していたが、留学から帰国した昭和一一年度の二学期に「上代文化史の諸問題」を題目に掲げた。同じ頃、論文においても、新たに「浮き世の成立」[24]や「日本古代思想」[25]などを発表しはじめている。留学をひとつのきっかけに、研究対象をさらに古い時代へと本格的に拡げた証左であろう。講義「上代文化史の諸問題」は一三年度で完結し、一四年度には再び「近世思想史」へと戻る。以後、講義では、基本的に近世と上代とを数年間隔で繰り返していくこととなる。なお、「上代文化史の諸問題」以降に関しては、勝也独特の細字によって文章体で記された講義ノートがほぼすべて残っており、講義の内容を詳細に知ることができる。[26]また講義の筆記を謄写したものもいくつか現存している。[27]一方、演習では、古事記・日本書紀から栄華物語や徒然草や世阿弥、さらには国学や水戸学などが取り上げられた。[28]竹岡の薫陶を受けた研究者に、西尾陽太郎（昭和一〇年卒）・城福勇（一五年卒）・田村円澄（一六年卒）らがいる。

大学運営の面では、一七年四月から一九年五月まで図書館長、そして昭和二〇年六月三〇日に法文学部長へ就いた。その直前の一九日に空襲で自宅を焼失、蔵書を失っている。敗戦後の一二月三一日に学部長を、次いで二一年三月三一日は九州帝国大学教授の職を退いた。勝也満五二歳のことである。また二三年四月、公職追放の指定を受ける。著書『日本思想の研究』および『現代の問題としての復古思想』がいわゆる覚書のG項に該当すると認定されたことによる。[29]

＊

住み慣れた福岡から居を太宰府へと移し、足かけ六年に及ぶ晴耕雨読の日々がはじまる。

子宝に恵まれた勝也であったが、一方で昭和一九年一一月八日には最愛の妻・芳を喪う悲運に見舞われていた。「寒さ如何に子等と通夜する隙間風」（阿部次郎）[30]。二一年に入って渡辺安子と再婚したものの、収入の道は途絶え、子供の多くが結核に冒されたこともあって家計は苦しかった。大学で講筵に列し、勝也を恩師と慕って援助を惜しまなかった天満宮の西高辻信貞をはじめ、太宰府の多くの人びとに支えられての生活であった[31]。また勝也もそれに応え、少なからぬ影響を太宰府へと残すことになる。

まず記すべきことは、『太宰府小史』の刊行であろう。同書は、長沼賢海・橋詰武夫との共著で、太宰府天満宮の千五十年大祭を記念して出版された。「五年間並々ならずお世話になった太宰府の事である。もし御役に立つ仕事があれば、何なりと」と、すでに去ることが決まっていた太宰府における最後の時間を費やして記された[32]。勝也の担当した「古代の太宰府」が、同書のほかの部分と同様に、現在の太宰府研究の起点ともいうべき位置を占めていることについては、川添昭二による委曲を尽した説明がある[33]。

また『根芹』の出版も忘れてはなるまい。本書は、阿部家の八人兄弟のうち、「生活が原稿に繋がつて居る四人の兄弟」[34]、すなわち次郎（哲学・美学／東北大学名誉教授―当時。以下同様）・余四男（よしお）（動物学／広島文理科大学教授）・勝也・六郎（ドイツ文学・文芸評論／成城高等学校教授）の共著であり、装幀を手がけた柏木俊一[35]も、勝也のすぐ下の妹である礼子の夫である。もともとは書肆による企画らしく、四人のうちでは勝也が中心となって実現まで漕ぎ着けた[36]。父母・祖父母への追憶が主題のひとつとなっているため、阿部家の兄弟たちによる父母像・祖父母像の重なりや違いなどを知ることができ、貴重な文献となっている。昭和五七年には角川書店より再刊された。

『根芹』の作業が一段落したころ、勝也は兄・次郎より日本文化研究所の助力を頼まれた。日本文化研究所の開設が正式に発表されたのは昭和二四年八月、次郎の還暦記念祝賀会席上でのことである。[37] 自分の死後もほかの人の頭と身体とに宿って、Aufgabe(課題)を遺していきたいという希望から、次郎は私設自由を旨とする日本文化についての研究所を構想していた。この計画の段階で、次郎はまず「統一日本の根幹としての皇位の機能(フンクチオン)」という問題をとりあげようとし、その歴史部門を引き受けるよう勝也に依頼、勝也はこれを受け容れた。

この問題そのものは、次郎がこの時期、戦後日本における天皇の役割について、それこそかつての盟友・和辻哲郎と同じく、深い関心を注いでいたことと関連するものだろう。[38] だが、一方で次郎は、「兎に角君が気乗りしてゐる何かの問題で僕の研究所に協力して貰うのが趣旨」とも述べている。勝也への助力の要請は、それを通じた生活への援助という面を深く考慮してのものだったようだ。[39] 数次にわたる研究会の開催を経て、研究所の開所式が挙行されたのは二九年六月のことである。

*

以上のように陽の目を見たもののある一方、この時期に勝也が単独で執筆した何冊かの書物は、いずれも公刊へと至らずに止んだ。『平安朝末期』を全面的に書き直して大阪の三明社から刊行する話があったが、実際に着手されたかどうか分からない。[40] またおそらく同社とのあいだであろう、『美術の旅』なる一書の出版も持ち上がった。欧州留学の際に各地の美術館・博物館へ足を伸ばし、古代エジプトから後期印象派まで、実際の作品に触れた感激を記した小品であり、こちらは一応の原稿も完成していたようだが、出版されることはなかった。[41] さらに『自叙伝』の執筆も何度か試みられたが、残念なことに、中絶したようである。[42]

これらのほかに『古代史の問題』が書き下ろされていた。[43] 『古代史の問題』は最終的には七章、四〇〇字詰め原稿用紙で二八四枚の分量になった。[44] その序はこうはじまる。

国史に対する信頼が失はれ歴史なき民として突き放された事は、敗戦日本が体験した最も痛ましき出来事の一つである。

以下、次のような論旨が続く。この国民の喪心状態を利用して、真理を冒瀆する偽学者が横行している。国民がこのような状態になった理由のひとつに歴史教育がある。しかし戦前期に誤った歴史教育が徹底されており、そこから国民が急に覚醒したためそうした状態がもたらされたというのは誤りである。そうではない。形式主義に囚われた戦前の歴史教育が、国民生活と歴史とを遊離させたことによって今日の有様が出現したのである。「世に歴史なき民ほど惨目なものはない。歴史なき民にはも早祖国もない」。「祖国を取り戻せ」。そして「祖国を取り戻すためには先づ歴史に対する信頼を取り戻さなければならない」。そのための作業の一環として、本書における古代史への探求はある、と。

敗戦直後に活字となった勝也の文章は少なく、[45] かれがどのように敗戦を受け止めたのか、またそれによってどのように自らの研究を定位し直したのかなどを考える上で、この原稿は貴重である。

そしてそこから朧気に浮かび上がってくるのは、敗戦にともなう劇的な変化などではまったくない。戦前においてなすべきことを十分に果たせなかった結果が悲惨な現状をもたらしたとの認識により、かつてなすべきであったことをあらためて行っていくことこそが使命とされる。なすべき作業に大きな変化がないどころか、むしろかつての課題をそのまま遂行し、完成へと近づけていくことこそ、歴史の回復に寄与する行為であると位置づけられる。そうした主張からすれば当然のことではあるが、戦時下で発表された歴史教育についての論考と、その骨格に変化はない。[46]『古代史の問題』は、新稿といっても、ほとんどが九州帝国大学での講義[47]を下敷きにしたものであり、この点からも、あえて変わらない、変わる必要などないという勝也の決然たる態度を見て取ることができるだろう。しかしそれ故に、本書の刊行は実現しなかった。勝也の注記には、「出版禁止となって返却された」

とある。

＊

昭和二五年一〇月一三日、追放処分が解除となった。勝也満五六歳。

扨て小生事、不明にして、昭和二十三年四月覚書該当者と指定せられ、爾来二年半、この太宰府神苑内に屏居謹慎罷在り候処、この度計らずも解除の恩典に浴し、再び自由の身と相成り申し候。事茲に至れる、全く皆様の御被護御誘掖の致す処と御恩顧の程、深く感佩罷在り候。固より生来不敏の身、今後と雖、皆様の御期待に添ひまつる事は不可能と存し候へ共、幸にして心身共に至つて健康、老ひたる駑馬に鞭打ちて逞しく再生の途を辿り度念願、何事引続き宜しく御願ひ申上げ候。

先づは右御挨拶までに

黄菊白菊空高く澄む日和かな[48]

「再生の途」を、勝也はかつてと同じく、研究と教育とに求めた。同じ年の一二月には早くも北海道大学行きの話が浮上している[49]。北海道大学は昭和二二年に法文学部を設置したが、この年に文学部が独立、スタッフの充実を画策しており、国史学科の創設にあたった阿部武彦と新城常三の二人が学部長の伊藤吉之助に勝也の採用を提案した[50]。伊藤は山形県酒田出身の哲学者。東大哲学科で主任教授を長らく務めたが、勝也の兄・次郎とは中学時代以来の旧知の仲であった[51]。勝也はこの話を呑んだ。二六年五月一五日に北海道大学教授（文学部国史学講座担当）に任じられ、九月に札幌へ赴任。翌二七年には家族をも招き寄せ、北国の瀟洒な官舎へと移り住んだ。

札幌では評議員や付属図書館長を歴任している。しかし先述した日本文化研究所が動き始め、病床にあった兄・次郎にかわって運営にあたる必要に迫られたこともあって、三〇年五月には東北大学教授へと転じた。仙台では、停年退職を迎える三二年三月まで短い期間ではあったが、村岡典嗣の退官後、しばらく空席になっていた文化史

学第一講座を担当して日本思想史研究室を主宰、日本思想史研究会の結成に尽力するなど、足跡を残した。[52] また三一年度の夏期休業期間中には、蔵王山の登頂をはじめ、郷里である山形県下を旅行してまわっている。なお、北大・東北大時代も、講義は基本的に古代と近世が数年間隔で扱われている。またその内容にも九大時代と比べて顕著な変化を見出すのは難しい。

停年後は国学院大学に転じた。兄・次郎から絶大な信頼を得ていた角川書店社長の角川源義が、考古学者で国学院の教授であった大場磐雄に提案したのがきっかけらしい。[53] かくて約三〇年ぶりに、単身赴任という形ではあったが、生活の拠点を東京に置くこととなった。

この第二の、そして最後となった東京時代には、大学では神道思想史などを担当するとともに、翌三三年度からは柳田国男や河野省三らとともに新設の大学院文学研究科神道学専攻博士課程を担当する予定であった。[54] これらに合わせて「中世神道の概観」や「近世神道史」などの講義ノートがつくられている。

こうしてわずか七年あまりのあいだに九州・北海道・東北・東京と居を移した勝也は、これまでと同様に古事記・日本書紀や国学を扱った論文を発表する一方、神道について、それもこれまで正面から取り上げることの稀だった中世のそれについて、いくつかの作品を残した。遺作となった「中世神道に於ける神観の発達」は、講演の記録ではあるが、そのひとつである。[55] また最初の東京時代、野上豊一郎を介して親しむようになったという能についても文章を著している。[56] 勝也は還暦をはさんで関心の幅をさらに拡げていたのである。

だが無事に博士課程が開設され、ようやく半年が過ぎようとしていた昭和三三年九月三〇日、勝也は東京の仮寓にて心筋梗塞の発作を起こし、そのまま逝去した。六四歳。これまでの仕事のまとめもなにもなく、そして新たな研究の全貌を示すこともなく、勝也は不意にこの世を去っていった。法名は耕雲院坦然照心居士。墓所は庄内の生家にほど近い宝蔵寺に営まれた。

二　山寺　少年時代

「われわれは自ら気づかないでいる、しかしわれわれはギリシアおよびキリスト教の文化に哺育されて来たのである[57]」。大正六年に和辻哲郎によって発せられたこの言葉は、唐突であるばかりでなく、いささか奇異に響くかもしれない。和辻本人についてみても、未完に終わった『自叙伝の試み』から伝わってくるのは、医者である父のもと、道のために生きるよう厳格にしつけられた姿であり、同じ文章中の言葉を使えば、儒教文化のなかに哺育されているように見える。

しかしこの不思議な印象は、読み進めていって次の言葉に出会うと、いくらかは解消されるだろう。「元来人間の気稟の上に最も決定的な形成の行われるのは、十二、三歳から十八、九歳までの間である」。すなわち和辻が言わんとしているのは、われわれ――かれはそれを、いくつもの留保を置きつつも年齢で区分し、概ね四四、五歳と五〇歳とのあいだに線を画した。時に和辻二八歳。和辻より四歳下の勝也ももちろんわれわれに入るだろう――が、十代に自己を形成していくまさにそのとき、自分たちの上の世代とは異なり、ギリシアそしてキリスト教の文化に包まれ、そして育まれたということなのである。

和辻のこうした捉え方からすると、竹岡勝也の生い立ちはさらに複雑な様相を呈している。勝也はキリスト教のなかに生まれたのである。

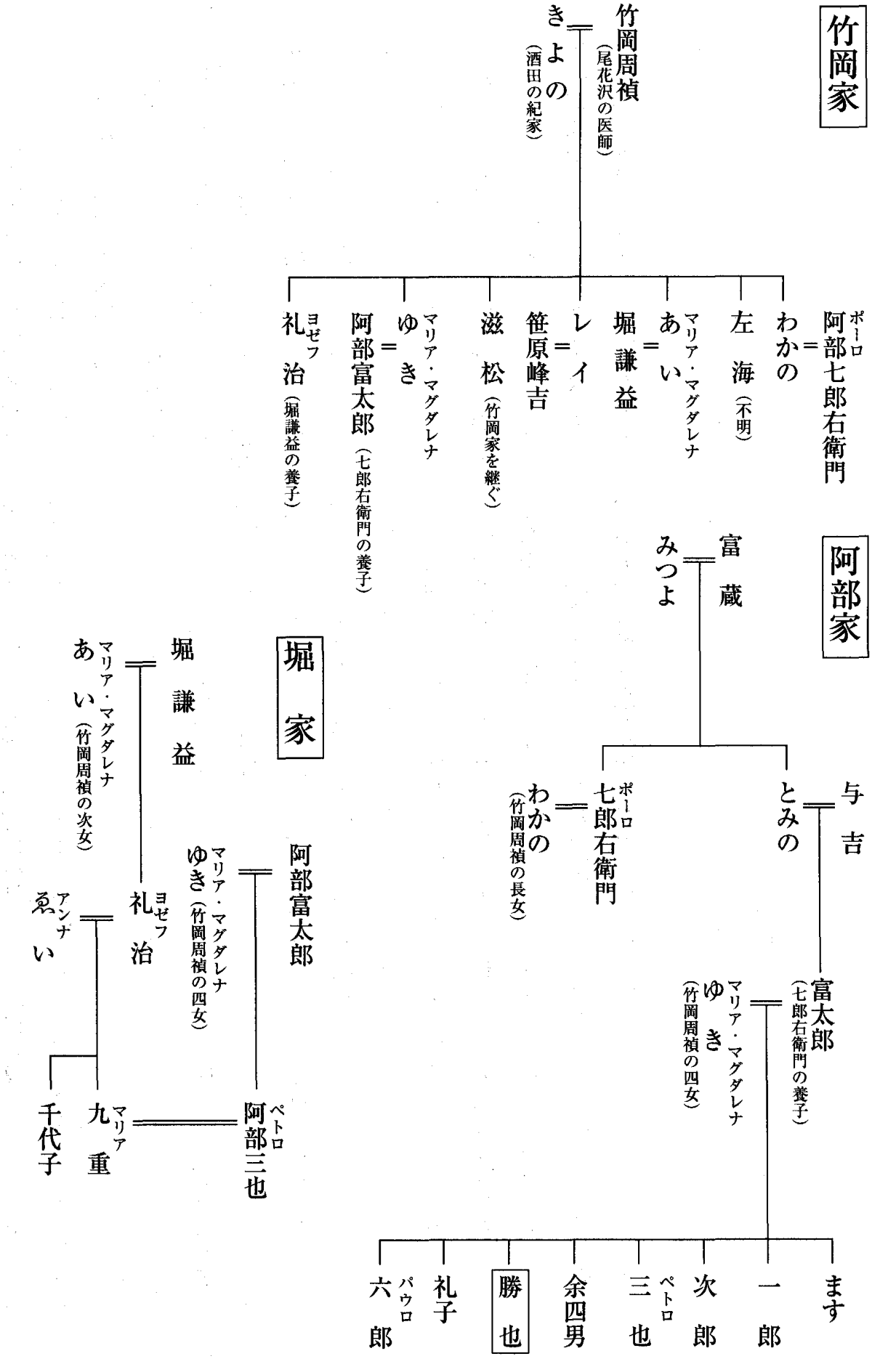
*

難解な言葉を噛み砕きつつ『三太郎の日記』を読みふけった二高生・勝也は、巻頭に置かれた「断片」の一節を決して見逃さなかったはずだ。

俺は羅馬旧教の伝説中に養はれた祖母に育てられて、北国の山村に成長した。山村の夜はとりわけ寂しく静かであつた。この寂しく静かなる山村の夜々に、桃太郎カチカチ山の昔噺と共に俺の心に吹き込まれたるものは、天国地獄煉獄の話であつた。[58]

祖母・わかのはいつも『耶蘇の聖心』なる小冊子を手にしていたという。[59] ときには不公平だと兄達に抗議を申し込まれるほど、祖母にかわいがられたと自ら述べ、[60] また現に祖父母のもとで育てられた勝也は、次郎と同様かそれ以上に、話し上手であったわかのが物語るカトリックの世界によって育まれたと言えるだろう。十歳という年齢差もあって、勝也が次郎と一所で生活をともにしたのは、勝也が生まれてから僅か二年ほどに過ぎない。しかし『三太郎の日記』におけるこうした記述により、勝也は、三太郎と同じ話を同じ祖母から聞いたという事実を確認し、そして自らのなかに三太郎と同じ血の通っていることを発見していったのである。

しかし阿部家ではわかの一人がカトリックに親しんだわけではない。[61] 最期まで洗礼を受けることのなかった祖母わかのに対し、母のゆきは、山形市香住町の教会で洗礼を受け、マリア・マグダレナの洗礼名を持っていた。またこの二人の影響もあって、祖父の七郎右衛門も、死の直前になって洗礼を受けた。なお、わかのとゆきとは実の姉妹でもある。二人の生家であり、のちに勝也が継ぐこととなる竹岡家では、この二人のほかにも多くの受洗者がいる。込み入った関係が続くので、参考のために系図を掲げておこう。


竹岡家
竹岡周禎（尾花沢の医師）
きよの（酒田の紀家）
ポーロ 阿部七郎右衛門
わかの
左海（不明）
マリア・マグダレナ あい
堀謙益
レイ
笹原峰吉
滋松（竹岡家を継ぐ）
マリア・マグダレナ ゆき
阿部富太郎（七郎右衛門の養子）
ヨゼフ 礼治（堀謙益の養子）
阿部家
富蔵
みつよ
ポーロ 七郎右衛門
わかの（竹岡周禎の長女）
与吉
とみの
富太郎（七郎右衛門の養子）
マリア・マグダレナ ゆき（竹岡周禎の四女）
ます
一郎
次郎
ペトロ 三也
余四男
勝也
礼子
パウロ 六郎
堀家
阿部富太郎
マリア・マグダレナ ゆき（竹岡周禎の四女）
ペトロ 阿部三也
マリア 九重
千代子
堀謙益
マリア・マグダレナ あい（竹岡周禎の次女）
ヨゼフ 礼治
アンナ 忍い

尾花沢の医師であった竹岡家にカトリックを最初にもたらしたのは、家を継いだ滋松であった。東京に出て苦学し、明治三一年にまだ三〇代の若さで逝ったこの人物が、兄弟たちを感化していったらしい。阿部家に近い山寺の医師・堀家の謙益に嫁いだあい、そこへ養子として入った礼治とその妻るい、そしてその子・九重は、明治二三年に山形教会で洗礼を受けている。

九重と同世代になるのが阿部家の兄弟たちである。はじめ九重とのあいだに縁談が持ち上がったのは次郎であったが、最終的には三也と結婚し、三也は堀家に入籍した。

堀三也は軍人で、陸軍士官学校第二三期、陸軍大学校第三三期。東京帝国大学にて経済学部の特別聴講生となるなど、経済通で知られたが、燃料局企画課長を最後に退官。のち国策会社・昭和通商の社長を務めるなど、学者の多い阿部兄弟のなかでは異色の存在である。[62] この三也も年月は不明ながら洗礼を受けており、またその子のうち二人は修道女となっている。

阿部家の兄弟たちのうち、三也のように洗礼を受けた者に末弟の六郎がいる。勝也よりも十一歳下で、一般には中原中也の詩「つみびとの歌」[63]や、シェストフやニーチェの翻訳で知られるこの弟は、[64] 息子の海紀夫と、妻・達の死という試練に遭遇し、幾度も悩んだ揚げ句、自らの死を前にしてついに洗礼を受けた。また長姉のますも、カトリックではなくプロテスタントではあるが、熱心な信者であり、夫となった加藤儀蔵をはじめ、家族を信仰へと導いている。

＊

しかし兄弟みながそのまま信仰へ入っていったわけではない。むしろ逆である。末弟・六郎の文章。

別に洗礼を受けもしなかつたし、教会に行つた憶えも稀にしかない。それでも自分では神を信じてゐたらしい。眼の弱つた母に針金をとほしてやつたりする時、「お前も大きくなると神様を離れて行くんだらうねえ」

などと悲しさうな声で言はれると、「離れるもんか」とむきになつて誓つた。[65]

お前も大きくなると――そうした母の危惧は、例えば、次のような兄達の言動に基づいていたのだろう。四男の余四男が語る母の思い出の一齣。「中学上級かの頃に進化論に心酔して居つた私が、一種の無神論を主張して、涙を流されたことがあつた[66]」。そして再び六郎の文章。福岡の兄とは勝也のことである。

或る夏の夜、福岡の兄がたしか二高の生徒で休みで帰つてゐたが、母と私が小簞笥兼祭壇の前に跪いてゐると、「どんな気持で祈つてるのか見てみよう」とか何とか言ひながら廊下にどつかりあぐらをかいて、腕組をして首をかしげながら私達を観察しだした。母はすつかりはにかんで笑ひながら祈りつゞけてゐたが、私は本気で腹を立ててこの不逞な異端者を追払つた。

「僕も祈りと告悔は認めるな」などとこの兄が言つたのを憶えてゐる。（ぢや何を認めないんだらう）と私は訝しく思つたやうな気がする。[67]

肉親の祈る様子を「観察」する「異端者」としての兄・勝也。しかし祖母わかのに可愛がられて育った勝也である、生まれながらにして「異端者」であったわけではない。むしろ逆である。

是までの自分の物の考へ方は、極めて単純であつた。人生といつても、その人生は自分の眼に見える一本の道に就て考へて居た人生に過ぎない。自分の心は早くキリスト教と結ばれた。教会から見れば不信の子であり、悪魔の使であつたかも知れないが、不信の子であるといふ事は、一面人生を考へる自分の立場が、キリスト教に置かれて居た事を意味する。凡てはこの道の立場から考へられ、自分の悩みもこの道に就て経験されて来た。

別に洗礼を受けもしなかったし、教会にもほとんど行かなかった。しかしすべてをキリスト教という一本の道から考えていた、あたかも「求道者」かなにかのように。中学校の頃を振り返って勝也はこう述べている。[68] ここ

から六郎のいう「異端者」――ただし祈りと告悔は認めているらしいが――への道はいかなるものだったのか、そしてそのことは勝也へといかに刻印されたのか――その点へと筆を進めるには、まだいささか準備が足りないようだ。まずは勝也も、阿部家のほかの兄弟たちと同じようにカトリックの伝説中に養われたことを見届けておいて、話を出生の時点へと戻すことにしよう。

*

勝也は明治二六年一一月一〇日、阿部富太郎・ゆきの第六子・五男として、山形県飽海(あくみ)郡上郷村大字山寺に生まれた。父は五六という名を提案したが、長姉のますが一、二、三で名を付けるから男の子だけ生まれるのだろうと異議を申し立てたため、勝也と命名されたという。[69]

上郷村は昭和の大合併によって松山町と名を改め、そして平成の大合併によりこの一一月より酒田市となった。以下では、阿部家の兄弟たちがそうしていたように、かれらの生地を大字名であった山寺と呼ぶことにしたい。

山寺は山形県の北西部、日本海へと広がる庄内平野の東に位置する。酒田の中心部へは一五キロ、鶴岡へはそれよりもう二～三キロはあるだろうか。ちょうど出羽丘陵と最上川に挟まれるような格好で伸びた地域である。阿部家の兄弟たちは成長するにしたがって山寺を離れていくが、かれらが故郷を思い起こすとき、そろって言及するのが、この最上川と、そして出羽丘陵の片隅にあたる外山(とやま)である。鉄道が通じるまで、[70]帰省のたびに最上川を船で下っていたし、帰ればしばしば外山に登った。例えば、夏休みに一高から戻ってきた次郎の日記。

午後三弟〔三也・余四男・勝也―引用者〕と外山に遊ぶ。胡蝶を追ひ、白百合・桔梗等ぬきて、一面芝なる山上を駆けまわり、疲れては腰をかけて、東の方、山又山をのぞむ。面白さいふばかりなし。[71]

外山から東の方が山また山とすれば、西の方には庄内平野と最上川そして日本海を臨み、さらに北には鳥海山、南には月山が聳える。次郎は外山へ最大級の讃辞を送ったのち、こう述べる。「まさに海に入ろうとする最上河と

その周囲に発達せる平野は、鳥海山や月山の中央山脈の山塊を盟友として、幼い私の魂をその懐の中に育ててくれたのである[72]」。ひとり次郎のみではないだろう[73]。

山寺は寛文三年（一六六三年）以来、松山藩領であった。出羽松山藩は鶴岡藩の支藩で二万五千石。戊辰戦争では宗藩の鶴岡藩と行動を共にし、官軍と戦ったが、降伏そして開城。言うなれば筋金入りの朝敵藩として明治を迎えたのである。城は山寺の隣町である松嶺にあり、武士が多く居住していたのに対し、山寺は農村であった。山寺のある上郷村の明治三二年の人口は二六九九人、松嶺町は二五四七人とある[74]。

阿部家は小規模な地主であった。ただし家は街道筋にあり、雑貨商を兼ねていた。現在は阿部記念館となっている生家の構造に、その面影を忍ぶことができる。勝也の生家は、農村にありながらもそれだけで完結することはできない、あるいは農村にとって不可欠ではありながら周辺的とでもいうべき場所に位置していた。

さらに勝也たちの父の富太郎である。富太郎の父・与吉は、七郎右衛門の姉であるとみののところへ婿に入り、万延元年（一八六〇年）に富太郎が生まれた。しかし、七郎右衛門に子供がなかったため、富太郎は叔父・七郎右衛門の養子となる。

富太郎は上京して東京法学院（のちの中央大学）へ通ったのち、山寺に近い余目（あまるめ）小学校の校長となる。そして勝也が生まれた明治二六年にもその職にあった[75]。しかし校長へおさまるまでには曲折のあった節もある。

山寺・松嶺を中心とする地域では、明治一四年に共同会という結社が創設されたが、富太郎は同会の中心会員の一人であり、しばしば演説を行ったりしている[76]。またかれ自身の二度目の上京にあたる明治二二年には、能弁術の修得を志して植木枝盛らに直について学んだとされ[77]、実際に同年一〇月一三日の植木の日記に富太郎の名前が現れる[78]。富太郎は「弁論の術を以て教育上に応用」しようとしたということであるが[79]、時期なども勘案すると、一時は強く政治へと心惹かれていたと推測することも可能だろう。いずれにしろ養子として阿部家を継いだはず

の富太郎は、家業を継ぐことはなく、教育者として一生を過ごすこととなる。

明治三〇年、勝也が数えで五歳の年に富太郎は山形県視学へと転任、妻・ゆきと生まれたばかりの妹・礼子を連れ、山形市内へと移り住んだ。山寺に残された勝也は、兄の三也や余四男と一緒に祖父母の手で育てられる。カトリックの伝説中に養われたというのはこのころのことになるだろう。またこのことの半面でもある母との別居も、勝也へは大きな影響を与えた。

山形は私達の村から二十八里ある。汽車が通じない頃の二十八里、子供心に取つて、それは見る事の出来ない雲外の世界であつた。母はその雲外の世界に住む女神として、子供心に特殊の意味を持つて居た。[80]

母の不在は、著しく理想化された母親なるものへの憧憬を勝也へもたらした。このことをめぐる心の揺れは、ある時期までの勝也を大きく規定していくこととなる。

*

明治三四年に勝也は地元の山寺尋常高等小学校へ上がった。同校は前年に尋常高等小学校となって高等科二年課程が加設、さらにそれが三六年には三年、三八年に四年へと延長されるなど、制度は目まぐるしく変わった。[81] ここで勝也は都合六年を過ごす。勝也と同じ年に入学した児童数は男子二七人、女子三七人。教員は学校全体で四人というこぢんまりとした学校であった。[82]

小学校時代の勝也を窺う手段はほとんどない。わずかに高等科二年・阿部勝也と表に記された作文帳が一冊残っている程度である。[83] 方言の音をそのまま記したり、あるいは「仏教ノ新派」という題の作文において「真宗ハ僧一邉ノ開ラキシモノニシテ」と書いて訂正されたりと、流麗な文章で知られた歴史家・竹岡勝也を予感させるものはない。ただ妙なおかしさが漂う文章はある。「熊」と題された作文の一節である。

人、もし死せるまねをなせは、熊は其の口に手をあて、いきのたへたるや否やを験し、いきたへたりと思はゞ、

こぶしを上げて其の背を打つて立ちさるなり。其のいたさ実にしのび難しと云ふ。

明治三〇年代も中頃になると、従来の作文教育を正面から否定し、作文の目的は自己の思想を円満に表現することにあるといった主張も登場、一部の現場ではその影響を受けたとされる。[84] しかしこの作文帳だけから判断すれば、山寺小学校にそうした波は及んでいなかったようである。なお、おそらくほかの兄弟たちと等しく、勝也も成績は良かったものと思われる。[85]

（以下、次号）

注

（1）竹岡勝也「歴史家への歩み」、『古代文化』二―五、一九五八年。
（2）竹岡勝也「読書と人生」、阿部次郎・阿部余四男・竹岡勝也・阿部六郎『根芹』金文堂出版部、一九四八年、一五六～八頁。
（3）唐木順三『現代史への試み』筑摩書房、一九四九年など。引用は、『新版・現代史への試み』筑摩書房、一九六三年、三三頁。
（4）阿部次郎が自らの洋行について記した昭和九年の文章の題名。『秋窓記』岩波書店、一九三七年所収。『阿部次郎全集』一〇、角川書店、一九六〇年。
（5）明確かつ古典的なものとして、生松敬三「戦前の日本文化論」、『思想』四六三、一九六三年がある。
（6）明確かつ古典的なものとして、上山春平「阿部次郎の思想史的位置―大正教養主義の検討」、『思想』四二九、一九六〇年がある。
（7）苅部直「歴史家の夢―平泉澄をめぐって」、近代日本研究会編『比較の中の近代日本思想』山川出版社・年報近代日本研究一八、一九九六年。
（8）竹岡勝也「読書と人生」一七九頁。
（9）もっともこれとは別個に、周囲との距離のなかで竹岡勝也を見ていく作業も必要だろう。その一部は、山口輝臣「大正時代の『新しい歴史学』―日本文化史という企て、和辻哲郎と竹岡勝也を中心に」、『季刊日本思想史』六七、二〇〇五年で展開した。
（10）大鐙閣より大正一一年に刊行されたのが最初の版。次いで大正一四年に改訂増補という形で而立社より刊行されたが、これは第

五巻までで中絶。昭和一六〜七年にかけて『日本新文化史』として内外書籍より全巻が再刊。このとき、竹岡のものを含め、いくつかの巻ではかなり大きく手が加えられた。さらに昭和一九〜二〇年には、一部の巻だけではあるが、日本電報通信社出版部から再版されている。なお、角川選書の『王朝文化の残照』は、内外書籍版によっているため、当初の大鐙閣版とは少なからぬ相違がある。

(11) 至文堂・国史研究叢書第三編、一九二七年。なお、同叢書の第一篇・第二篇はともに平泉澄による『中世における精神生活』、『中世における社寺と社会との関係』で前年の刊行、第四編は坂本太郎『上代駅制の研究』で翌年の刊行。以後、七編まで刊行。

(12) 同文書院、一九四〇年。同年中に増訂版あり。

(13) 理想社・日本思想大系四、一九四三年。本大系の竹岡以外の著者は、浅野明光・小林健三・重松信弘。

(14) 目黒書店・教学新書三、一九三九年。

(15) 教学局・日本精神叢書五〇、一九三九年。このほか内閣印刷局・日本精神叢書四六、および日本文化協会・日本文化五一の版もある。いずれも一九四〇年刊。

(16) 以下、大学の制度的記述については、『九州大学五十年史』学術史・下、九州大学創立五十周年記念会、一九六七年による。

(17) 長沼賢海(一八八三〜一九八〇)は、東京帝国大学文科大学にて国史学を専攻。広島高等師範学校教授などを経て、昭和一八年まで九州帝国大学教授。海事史や宗教史の研究で知られ、大著『日本宗教史の研究』(教育研究会、一九二八年)のほか、『室町時代史』(雄山閣・大日本史講座、一九三〇年)、『日本の海賊』(至文堂・日本歴史叢書、一九五五年)など多くの著書があり、また九州大学の九州文化史研究所に所蔵されている長沼文庫でも知られる。その人となりは、井上忠・渡辺正気編『恩師長沼賢海先生の思い出』鏡山猛、一九九三年によって窺うことができる。

(18) 長沼賢海「明治・大正・昭和」、『日本歴史』四〇〇、一九八一年。

(19) 竹岡和田男「ターザンの猛襲—見そこなったあの日」、竹岡和田男事務所編『一本の映画—その時私は』北海道フィルムアート、一九九〇年。

(20) 竹岡勝也「あの頃の小島君」、『独立美術』一〇、建設社、一九三三年。

(21) 留学の様子が窺えるものとして、竹岡勝也「世界史と国民史—滞欧所感の一節」、『史淵』一三、一九三六年、同「歴史的精神」、『肥前史談』一六—一、一九四二年などがある。佐賀高等学校における講演に基づく後者には、勝也を含めて、日本では同情ある

観察のなされていなかったナチスについて、ドイツで直接目撃したことにより、「日本に於て考へて居たとは異なつた感じを持たざるを得なかつた」といった言葉がある。

(22) 竹岡勝也「漢代文様の雲崗石窟に於ける展開」、『史淵』二五、一九四一年などはその成果である。また同「承徳の一日」、日野開三郎編『重松先生古稀記念九州大学東洋史論叢』九州大学文学部東洋史研究室、一九五七年という小文もある。

(23) 『史淵』各号の「彙報」のほか、竹岡勝也「扶余行」、『根芹』による。

(24) 『史淵』一五、一九三七年および一六、一九三八年。

(25) 『日本評論』一三―七、一九三八年。

(26) 東北大学史料館蔵《竹岡勝也文書》。以下、本稿における講義内容についての記述は、すべて同文書所蔵の講義ノートによる。

(27) 九州大学附属図書館六本松分館蔵《檜垣文庫》に、学生筆耕会による竹岡述『近世日本思想史』（一九三一年）と、刊行所・刊年ともに記載のない竹岡教授述『上代文化史』がある。《竹岡勝也文書》の講義ノートとの照合から、前者は昭和六年二学期、後者は昭和一一年二学期のものであることが分かる。なお、檜垣文庫は檜垣元吉（昭和一〇年卒・九州大学教授）旧蔵の史料群。

(28) 主に『史淵』各号の「彙報」による。

(29) 『官報』号外、昭和二三年五月七日。なお、勝也が斯道文庫の顧問（昭和一四年から）、次いで理事（一八年一二月から）を務めたことは、公職追放と直接には無関係である。斯道文庫は当初こそG項該当言論報道団体に名を列ねたが、同年中には外れている。昭和二二年六月三〇日総理庁令内務省令第三号、および同年一一月二五日同第一一号。あわせて慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編・刊『斯道文庫三十年略史』一九九〇年を参照。

(30) 阿部次郎句日記・昭和一九年一一月八日、『阿部次郎全集』一五、二三一頁。

(31) 西高辻信貞「都府楼に立ちて思うこと」、同『邂逅』太宰府天満宮、一九八八年。あわせて森弘子『西高辻信貞―わがいのち火群ともえて』太宰府天満宮、一九八八年。また竹岡羊子氏の談話で補った。羊子氏は勝也の長男・和田男の妻で太宰府のご出身。

(32) 竹岡勝也「序」、太宰府天満宮編・刊『太宰府小史』一九五二年。「序」には「札幌の寓居にて」とある。

(33) 川添昭二「竹岡勝也と『太宰府小史』」、『政治経済史学』四三八・四三九、二〇〇三年。

(34) 竹岡勝也「序」、『根芹』。

(35) 画家としての輪廓は、『柏木俊一展』佐野美術館、一九八八年を参照。

(36) 刊行に至る経緯は、同書中の記述のほか、昭和二二年五月から翌年二月にかけての竹岡勝也宛阿部次郎書翰、『阿部次郎全集』一七、角川書店、一九六六年、五三五～五四〇頁などによった。

(37) 日本文化研究所の創設については、北住敏夫『阿部次郎と斎藤茂吉』下、桜楓社、一九八五年、二五三～九頁など参照。

(38) 当該期の日記、例えば、昭和二二年九月七日、『阿部次郎全集』一五、四九八～九頁などを参照。

(39) 昭和二三年八月三一日付、および九月二五日付竹岡勝也宛阿部次郎書翰、『阿部次郎全集』一七、五四〇～三頁。

(40) 角田文衛「解説」、『王朝文化の残照』三一一～二頁。

(41) 原稿等は未見。昭和二四年五月一九日付、および六月三日付竹岡勝也宛阿部次郎書翰、『阿部次郎全集』一七、五四四～六頁による。

(42) 原稿等は未見。昭和二四年一〇月二一日付竹岡勝也宛阿部次郎書翰、『阿部次郎全集』一七、五四六頁による。

(43) 以下の記述は《竹岡勝也文書》の関連史料による。同文書中には、昭和二三年一二月の序をもつ完成稿と見られるもののほか、昭和二二年五月と記された序も存在し、こちらには『古代史の諸問題―神話と歴史』と、副題が付されている。ただし以下で引用する序の内容に違いはない。

(44) 章立ては以下の通り。「歴史意識の発生と記紀の成立」、「神代史の批判と解釈」、「高天原と常世国」、「魏志の倭人伝と宋書の倭国伝」、「古代社会と氏族」、「大化新政と氏族制度」、「氏神の問題」。

(45) この「序」と合わせて参照されるべきものとして、次のような文章が挙げられる。竹岡勝也「神代史の批判」、『朝日評論』一―二、一九四六年四月。同「歴史と神秘」、『新生』二―五、一九四六年五月。

(46) 竹岡勝也「歴史教育の本質」、『科学文化』二―九、一九四二年八月。

(47) とくに昭和一七年度の二学期と翌年度の一学期にかけてなされた講義「上代文化史の諸問題」。《竹岡勝也文書》。

(48) 昭和二五年一〇月二〇日付阿部襄宛竹岡勝也書翰、松山町阿部記念館蔵。印刷葉書。

(49) 昭和二五年一二月二七日付、および二六年一月一四日付竹岡勝也宛阿部次郎書翰、『阿部次郎全集』一七、五四九～五五〇頁。

(50) 阿部武彦「北海道での竹岡先生」、『古代文化』一〇、一九五八年。

(51) 松山町編・刊『松山町史』下、一九九三年、九四〇頁など。荘内中学校では阿部次郎と宮本和吉（成城大学学長などを務めた）が同級、伊藤は後輩にあたる。

(52) 東北大学百年史編集委員会編『東北大学百年史』四・部局史一、東北大学研究教育振興財団、二〇〇三年、二四六～七頁。
(53) 大場磐雄「竹岡先生と酒と私」、『古代文化』一〇、一九五八年、一一三頁。次郎と角川との関係については、大平千枝子『父　阿部次郎』東北大学出版会、一九九九年、二八二～八頁など。勝也の次男・国雄は角川書店に勤務している。
(54) 国学院大学校史資料課編『国学院大学百年史』下、国学院大学、一九九四年、一一六九～一一七一頁。
(55) 『国学院大学日本文化研究所紀要』四、一九五九年。
(56) 「能楽に於ける神」、『千家尊宣先生還暦記念神道論文集』神道学会、一九五八年など。
(57) 和辻哲郎「日本の文化について（「偶像礼賛」序論）」、『思潮』大正六年五月。『和辻哲郎全集』二一、岩波書店、一九九一年、一六七頁。
(58) 阿部次郎「断片」、『阿部次郎全集』一、二二頁。
(59) 新関岳雄『光と影―ある阿部次郎伝』三省堂、一九六九年、三八～九頁。
(60) 竹岡勝也「祖母さんの話」、『根芹』一二八頁。
(61) 以下の記述は、新関『光と影』のほか、次の文献を参照した。阿部悠紀子「永訣」、『阿部六郎全集』月報一、一九八七年。森川甫「阿部次郎兄弟らへの長姉ますからの書簡―キリスト教との関連」、『関西学院大学社会学部紀要』六五、一九九二年。荻原泉「松山町の『阿部家』の人々を巡って」、同『神の小羊―鶴岡カトリック教会略史』鶴岡カトリック教会、一九九六年。なお、森川論文は、加筆・改題の上、森川甫・美穂子編・刊『地上の故郷から天の故郷へ―釜田彰介と徳子』二〇〇五年に所収された。
(62) 昭和通商については、山本常雄『阿片と大砲―陸軍昭和通商の七年』ＰＭＣ出版、一九八五年がある。
(63) 「阿部六郎に」との献辞がある。中也の生前に刊行された唯一の詩集『山羊の歌』文圃堂、一九三九年所収。
(64) 業績は『阿部六郎全集』全四冊、一穂社、一九八七～八年にまとめられている。なお、信仰にも触れた六郎論としては、短いものだが、高橋英夫「魂と思弁―阿部六郎を読む」、『群像』五二―四、一九九七年がある。
(65) 阿部六郎「母の断片」、『根芹』二〇一頁
(66) 阿部余四男「私の観た母」、『根芹』一一九頁。
(67) 阿部六郎「母の断片」、『根芹』二〇二頁。同じ出来事は阿部六郎「母」、『阿部六郎全集』三、五六九～五七〇頁にも登場する。こちらでは勝也を指して「トルストイアンの五兄」とある。トルストイへの傾倒については四章以下で述べたい。

(68) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』一四一～二頁、一四五頁。
(69) 阿部余四男「幼少時代の竹岡」、『古代文化』一〇、一九五八年。
(70) 福島～山形間の開通は明治三四年、新庄までは同三六年。酒田までは大きく遅れて大正三年。
(71) 阿部次郎日記・明治三五年八月三日、『阿部次郎全集』一四、七三頁。
(72) 阿部次郎「最上河」、『阿部次郎全集』一〇、角川書店、一九六〇年、引用は九四頁。
(73) 例えば、阿部余四男「山の誘惑」、『根芹』七一～六頁。
(74) 松山町史編纂委員会編『松山町史年表』土方大美、一九七五年、一五九頁。
(75) 庄内人名辞典刊行会編・刊『庄内人名辞典』一九八七年、一一七頁。
(76) 『松山町史』下、五〇二～六頁。
(77) 諏方武骨編・刊『山形名誉鑑』一八九一年、一三六頁。
(78) 『植木枝盛集』八、岩波書店、一九九〇年、九一頁。
(79) 注（77）に同じ。
(80) 竹岡勝也「祖母さんの話」、『根芹』一二五頁。
(81) 『松山町史』下、六五四頁。
(82) 山形県教育史資料編集委員会編『山形県教育史資料・統計篇』六、山形県教育委員会、二三四～五頁。
(83) 阿部記念館蔵。巻下とある。
(84) 田中瑩一「明治三十年代の地方における作文教育事情—島根県飯石郡児童文集『花くらべ』を通して」、今井文男先生喜寿記念論集刊行委員会編・刊『今井文男先生喜寿記念・表現学論考』一九九三年など。
(85) 阿部次郎日記・明治三六年四月五日などから推測。『阿部次郎全集』一四、一一一頁。